

# 平成 2 0 年度病害虫発生予報第 8 号

平成 2 0 年 9 月 1 1 日  
鳥取県病害虫防除所

## 予報の概要 [ 参考 ]

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	-	やや少ない
		カメムシ類	-	やや多い
果 樹	ナ シ	黒斑病	-	平年並
		ハダニ類	-	やや多い
		クワコナカイガラムシ	平年並	平年並
		シンクイムシ類	平年並	やや多い
	ブドウ	べと病	-	平年並
		ブドウトラカミキリ	平年並	平年並
チャノキイロアザミウマ		-	平年並	
リンゴ	ハマキムシ類	平年並	平年並	
	共通（枙、柿、リンゴ）	ハダニ類	-	平年並
野 菜	ネ ギ	カメムシ類	-	やや多い
		黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	平年並	やや少ない
	キャベツ、 ブロッコリー	ネギアザミウマ	平年並	平年並
		べと病	平年並	平年並
		黒腐病	平年並	平年並
		軟腐病	平年並	平年並
		コナガ	平年並	平年並
		ヨトウムシ	平年並	平年並
	トマト、ミニトマト	ハイマダラノメイガ	平年並	平年並
		疫病	平年並	平年並
	ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並
ヤマノイモコガ		平年並	平年並	
ハダニ類		平年並	やや少ない	
トマト、ミニトマト、キャベツ、 ブロッコリー、イチゴ	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	
ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平年並	平年並	
シ バ	さび病	平年並	平年並	
	スジキリヨトウ	平年並	平年並	
	シバツトガ	平年並	平年並	

## 気象予報（抜粋）

1 か月予報（9月6日～10月5日：9月5日、広島地方气象台発表）

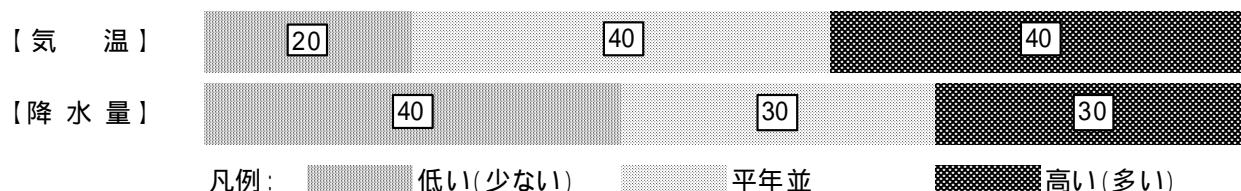
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

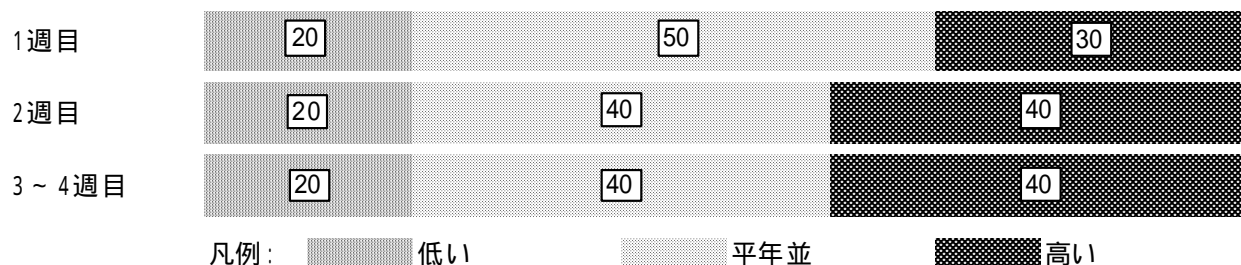
向こう1か月の気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は平年並の確率50%、2週目、3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### [ダイズ]

#### 1 ハスモンヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生量 やや少ない

##### (2) 予報の根拠

ア 8月第6半旬現在、フェロモントラップにおける雄成虫の総誘殺数は、平年に比べてやや少ない。

イ 8月28日現在、発生ほ場率は68.3%(平年:76.2%)で平年並の発生であるが、1a当たりの平均白変葉か所数は0.4か所(平年:1.2か所)で、平年に比べて少ない発生となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生にやや好適な条件であると考えられる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、農薬のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、白変葉を確認しにくいほ場が多いので、観察に当たっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。

ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。なお、中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ロムダン粉剤DL、ミミックジョーカー粉剤DL、ラービフロアブル、マトリックフロアブルなどを散布すると、比較的效果が高い。

#### 2 カメムシ類

##### (1) 予報の内容

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 8月28日現在、発生ほ場率は61.1%(平年:36.2%)、25株当たり平均成幼虫数は1.2頭(平年:0.8頭)で、平年に比べてやや多い。

イ 現地ほ場では、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの発生がみられる。

ウ 8月第5半旬現在、予察灯における総誘殺数は平年並となっている。

エ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の発生にやや好適な条件であると考えられる。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、9月以降に密度が急増する傾向があるため、現在、発生密度が低いほ場であっても、今後の発生状況に注意し、発生が多い場合は追加防除を行う。

## 果 樹

### [ ナ シ ]

#### 1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場における新梢葉での発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液又はアリエッティC水和剤800倍液などを散布する。なお、現在、新梢葉の発病が多い園では、収穫後に必ず2回の防除を行って、病原菌の花芽への侵入を防ぐ。

ウ 越冬菌密度を下げるため、落葉後(11～12月)の落葉処分を励行する。

#### 2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬現在、県予察ほ場(北栄町)におけるハダニ類(主にクワオオハダニ)の発生はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の発生にやや好適な条件であると考えられる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では、収穫が終わり次第薬剤を散布する。

イ 防除薬剤は、病害虫防除暦などを参考とする。

ウ 近年、越冬ダニによる春期の被害が認められている。特に、収穫中にハダニ類の発生が多く認められる園では、収穫後の防除を徹底する。

#### 3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(北栄町)における発生量は平年並である。

イ 第2世代の幼虫ふ化時期は、ほぼ平年並の8月下旬～9月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期に本種の発生が認められる園では、翌年に多発する可能性が高いので、収穫後の防除を徹底する。

イ 多発園では、収穫が終わり次第ダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを散布する。

#### 4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、フェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並～やや多い。

イ 県予察ほ場（北栄町、品種‘ゴールド二十世紀’、無袋栽培・無防除）では、8月下旬頃からシンクイムシ類による果実被害が増加傾向にある。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、晩生品種（新高、新興、王秋など）の被害発生が予想されるため、防除を徹底する。特に、二十世紀などで被害が多かった地域では、被害発生が懸念されるので注意する。

イ 薬剤は少発生園ではDDVP乳剤1,000倍液などを、多発生園ではアグロスリン水和剤2,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

### [ブドウ]

#### 1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量	平年並
-----	-----

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地における発生量はほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるため、収穫終了後の薬剤散布を1～2回行う。

イ 薬剤は、収穫終了後にICボルドー48Qの50倍又は3-2式～6-3式ボルドー液を散布する。なお、無加温ハウス栽培でのビニール除去後及び露地栽培では、散布時に固着性展着剤を加用する。

#### 2 ブドウトラカミキリ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町）における発生量は、ほぼ平年並である。

イ 成虫羽化最盛期は、ほぼ平年並の8月下旬～9月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は9月中旬頃であり、薬剤はスミチオン水和剤40の800倍液などを散布する。
- イ 本種の羽化は長期間に及ぶため、9月の防除では十分な効果が得られない場合がある。そのため、被害が多い園では、必ず10月中旬にモスピラン水溶剤2,000倍液などを散布する。

3 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)における被害の発生はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生にやや好適な条件であると考えられる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、収穫終了後にパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。
- イ 9月に発生が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

4 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、フェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少ない。
- イ 県予察ほ場(北栄町)では、7月下旬から被害房が散見され、8月下旬現在、平年並の発生量である。
- ウ 向こう1か月の気象予報とこれまでの発生経過から、次世代成虫の発生ピークは9月中~下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、9月下旬にサイアノックス水和剤の1,000倍液などを散布する。
- イ 近年、秋期の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。秋期の発生は越冬密度を高め、翌春の発生量の増加を招くため、収穫後であっても注意してほ場を観察する。

[リンゴ]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)におけるハダニ類の発生量はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の発生にやや好適な条件であると考えられる。

(3) 防除上注意すべき事項

- 発生が認められた場合は、カネマイトフロアブル1,500倍液などを散布する。

## [ 共通 ( ナシ、カキ、リンゴ ) ]

### 1 カメムシ類 ( 平成 20 年 7 月 11 日付、病虫害発生予察注意報第 3 号発表 )

#### ( 1 ) 予報の内容

発生量 やや多い

#### ( 2 ) 予報の根拠

ア 8 月下旬現在、予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数は、ほぼ平年並である。一方、予察灯におけるクサギカメムシの誘殺数は八頭町でやや多い。

イ 集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数は、ほぼ平年並である。

ウ 9 月 6 日現在、県予察ほ場 ( 北栄町、品種 ‘ ゴールド二十世紀 ’、無袋栽培・無防除 ) では、カメムシ類の飛来がわずかにみられる。

エ 向こう 1 か月の気象予報から、カメムシ類の活動にやや好適であると考えられる。

#### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園内にカメムシ類の発生が認められた場合は、病虫害防除暦などを参考に薬剤を散布する。

イ 今後、山林で餌不足となった場合などは、カキなどを中心に果樹園に飛来する恐れがある。そのため、定期的に果樹園などを観察し、早期発見に努める。

## 野 菜

### [ ネギ ]

#### 1 黒斑病

##### ( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### ( 2 ) 予報の根拠

ア 8 月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は平均気温 25 前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

##### ( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール 1000 の 1,000 倍液、ポリベリン水和剤 1,500 倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤 1,000 ~ 1,500 倍液などを散布する。

#### 2 ネギハモグリバエ

##### ( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

##### ( 2 ) 予報の根拠

ア 8 月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 県予察ほ場 ( 北栄町 ) における発生量はやや少ない。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アクタラ顆粒水溶剤 1,000～2,000 倍液、ダントツ水溶剤 2,000～4,000 倍液、アグロスリン乳剤 2,000 倍液などを 7～10 日間隔で薬剤を替えて散布する。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。  
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アクタラ顆粒水溶剤 1,000～2,000 倍液、ダントツ水溶剤 2,000～4,000 倍液、アグロスリン乳剤 2,000 倍液、ランネート45DFの1,000～2,000 倍液、モスピラン水溶剤 2,000 倍液、アドマイヤーフロアブル 2,000～4,000 倍液などを 7～10 日間隔で薬剤を替えて散布する。

[ キャベツ、ブロッコリー ]

1 べと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。  
イ 本病は気温が比較的低温、降雨が多いと発生が多くなる。  
ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの防除薬剤は、ヨネポン水和剤 500 倍液、ダコニール 1000 の 1,000 倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）400～600 倍液、リドミルMZ水和剤 1,000 倍液などを予防散布する。  
イ ブロッコリーの防除薬剤は、花蕾に発生するべと病の防除を対象に、リドミルMZ水和剤の 1,000 倍液を10月から10日間隔で2～3回散布する。  
なお、本剤は花蕾形成前までの散布とする。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。  
イ 本病は、降雨が多いと発生が多くなる。  
ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。
- イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないように注意する。
- ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。
- エ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又はカッパーシン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル500～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- オ ブロッコリーの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又はカッパーシン水和剤）1,000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 本病は、気温が比較的高く、降雨が多いと発生が多くなる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。
- イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。
- ウ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又はカッパーシン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル800～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- エ ブロッコリーの防除薬剤は、ナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

4 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数はやや少ない。
- イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア アクタラ粒剤5の2g/株（育苗期後半、キャベツ及びブロッコリーに登録あり）を株元散布、またはジノテフラン水溶剤（アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤）50～100倍をセルトレイ灌漑（定植前日～定植時、キャベツに登録あり）処理する。
- イ 本ぼでの発生時には、プレオフロアブル1,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル1,000～2,000倍液、プリンスフロアブル2,000倍液などを散布する。



## 5 ヨトウムシ

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの防除薬剤は、アセフェート剤（オルトラン水和剤、ジェイエース水溶剤など）1,000～1,500倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

イ ブロッコリーの防除薬剤は、マトリックフロアブル1,000～2,000倍液、ランネート45DFの1,000倍液などを散布する。

## 6 ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの防除薬剤は、プリンスフロアブル2,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを、1週間程度の間隔で散布する。

イ ブロッコリーの防除薬剤は、プリンスフロアブル2,000倍液などを散布する。

## [ トマト、ミニトマト ]

### 1 疫病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場での発生量は平年並である。

イ 本病は、気温20前後で施設内が多湿となる場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 換気を良好にし、過度にかん水を行わないように注意する。

イ トマトの防除薬剤は、発病前から定期的にマンゼブ水和剤（ジマンダイセーフフロアブル又はペンコゼブフロアブル）1,000倍液、ダコニール1000の1,000倍液、ランマンフロアブル1,000～2,000倍液などを散布する。初発生確認後は、リドミル銅水和剤400～600倍液、フェスティバルC水和剤600～800倍液などを散布する。

ウ ミニトマトの防除薬剤は、発病前から定期的にペンコゼブフロアブル1,000倍液、ランマンフロアブル1,000～2,000倍液などを散布する。

## [ ナガイモ ]

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 大雨や台風の直後に、天候が回復した後できるだけ早く薬剤散布する。

エ 防除薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液(ムカゴにも登録あり)、ジマンダイセン水和剤400~600倍液などを散布する。

オ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針などを参考にしながら、薬剤を選択する。

### 2 ヤマノイモコガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア アタブロン乳剤2,000倍液(ムカゴにも登録あり)、トレボン乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)などを7~10日間隔で2回程度散布する。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

ウ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針などを参考にしながら、薬剤を選択する。

### 3 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、ニッソランV乳剤1,000~1,500倍液、コロマイト乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)、コテツフロアブル2,000倍液(ムカゴにも登録あり)などを葉裏にも薬剤が付着するように丁寧に散布する。

イ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針などを参考にしながら、薬剤を選択する。

## [ トマト、ミニトマト、キャベツ、ブロッコリー、イチゴ ]

### 1 ハスモンヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるフェロモントラップの成虫誘殺数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場（キャベツ、ブロッコリー）における発生量は平年に比べてやや少ないが、一部のほ場では卵塊や若齢幼虫による被害がみられている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、今後の発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ トマト及びミニトマトでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

ウ キャベツでは、アタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、トルネードフロアブル2,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。

エ ブロッコリーでは、カスケード乳剤4,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

オ イチゴでは、若齢幼虫にアタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液、ラービンフロアブル1,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、アフーム乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。

## [ ネギ、ナガイモ ]

### 1 シロイチモジヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場（ネギ）における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫期が防除適期である。これを逃すと極めて防除が困難となるため、早期発見に努め、早めに防除を行う。

イ ネギの防除薬剤は、ランネート45DFの1,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを散布する。

ウ ナガイモ（ムカゴを含む）の防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を用いて、5～7日間隔で2回程度防除を行う。

## [シバ]

### 1 さび病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地生産シバ調査ほ場における発病は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

発生初期にバシタック水和剤75の500～1,000倍液、バイレトン乳剤2,000倍液などを散布する。

### 2 スジキリヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、フェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

若齢幼虫を対象にダイアジノン乳剤40、スミチオン乳剤の1,000倍液、ダズバン乳剤40の1,000～1,500倍液、スカウトフロアブル1,500倍液などを散布する。

### 3 シバツトガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、フェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、ダイアジノン乳剤40、スミチオン乳剤の1,000倍液、ダズバン乳剤40の1,000～1,500倍液、スカウトフロアブル1,500倍液などを散布する。

## [おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には十分注意しましょう。**

### < 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : [boujyot@titan.ocn.ne.jp](mailto:boujyot@titan.ocn.ne.jp)

次回の予報発表は、10月9日(木)の予定です。